

男性単数生格語尾 - y について

千葉 萌一郎

О форме родительного падежа единственного числа на -y (-ю) в именах существительных мужского рода.

Хоитиро, тибя

-ÿ 語幹名詞は、-ö 語幹名詞の影響を受けてその独自性を失い、-ö 語幹名詞の中に吸収されてしまったが、しかし -ö 語幹変化の中に明らかにいくつもの痕跡をとどめている。私は今その痕跡の一つである男性名詞単数生格語尾 -y / -ю をとりあげて、主要な学者の意見を紹介しつつロシア語におけるその位置を確かめたいと思う。

-ö / -jö 語幹名詞の単数生格語尾は -a / -ja であった。すでに初期の文献には、その頃の -ö 語幹名詞が -ÿ 語幹名詞と相互に影響のあったことが現われている。その原因は原始スラブ語において、-ÿ 語幹名詞の主格と対格が -ö 語幹男性名詞のそれと一致していたからに外ならない。その結果、同一の名詞がそれぞれの変化形の間で動揺しているのが認められる。

-ÿ 語幹名詞の生格では、до връха(Остр.ев.), паче меда (Панд. Ант. XI 世紀), въ има оца и сна и стго дха (Юр. ев. 約1120年), не дадаше въпрачи кона ни вола (Лавр. лет.).

-ö 語幹男性名詞生格では、отъ льноу (Св. изб. 1073年), отъ лну (Новг. гр. 1265年), горохоу (Русская Правда 1282年), съ пълкоу (Новг. Синод. лет.), до търгоу (同様), съ торожоу (同様), роду княжа (Лавр. лет.).

ところで語尾 -y は、Остромирово евангелие, 1056年-1057年, Минеи 1095年, 1096年, 1097年, Архангельское евангелие, 1092年, Чудовская псалтирь の教会関係の文献には殆んど見出すことはできないが、Русская Правда 等の文献には多数の単数生格語尾 -y が見られる, 7 въдерь солоду, а горохоу 7 оубороковъ.

又、語尾 -y は多くの文書類にも多数存在している。Новгородские грамоты には、до торъжку, торъжку, торъшку, рядоу, низоу, полоноу, лну。又、Материалы Суздальской летописи (Лаврентьевский список による) には、Прибѣгъ съ полку, оу полку, ис полку, от полку, ис, до торъжку, посредѣ роду, с которого стану, бою не бы^сがある。

-y 語尾の広い滲透と一定の意味群における男性名詞への定着については、学者がそれぞれ見解を述べているが一様ではない。Л. А. Булаховский は大要次のように述べている。

ロシア語標準語においては、多くの男性名詞に単数生格語尾 -a と並んで語尾 -y が使用されているが、これは -ÿ 語幹、即ち -ö 語幹に平行する男性の古い変化形(単数主格 сынъ, 生格 сыну, 与格 сынови) から滲透したものであった。снегу(снега), духу(духа), меду(меда) タイプの単数生格が男性名詞からのみ作られて、変化形が極めて近接しているにも拘らず標準語においては中性名詞に関わりがないのはこのためである。

何故多くのスラブ語において、相対的に数の少ない -ÿ 語幹が、与格に同形の語尾があるにも拘らず、生格のために同傾向の意味の差異を示す語尾を形成したのか原因が明らかでな

い。しかしながらロシア語においては、この形態カテゴリーの成立についてある程度光を与える状況がある。それはこれ等語尾の使用に次のような共通の特徴があるからである、としている。

1. 不活動体及び集合名詞であること, пуху, народу.
2. 一定又は不定の指示を受けた量目, 重さに関する名詞(物質名詞)であること, воску, чаю.
3. 抽象名詞であること, шуму, доходу.
4. 前置詞と結合して副詞に近い意味をもった場合であること, из лесу, с краю.

副詞タイプの結合を除けば、これ等の名詞に共通する性格は、通常複数形をもたない語であるということである。

古くからの、特に意味の上から理由づけられぬこれ等語尾の平行的使用は、ただ単数形のみを有する語の特別な意味カテゴリーの分出を推し進めた。-ŭ 語幹物質名詞の中で特に影響力のあったのは меду, солоду であつたろう。мед は Русская правда, Обърти の法関係文獻に広く使用されて、物質名詞が語尾 -y をとることに力をかけた。前置詞との結合に関しては、かなり容易に類推の具体的な過程を指摘することができる。古い -ŭ 語幹中、例えば домъ, разъ, връхъ (古代スラブ語 връхъ) は из дому, съ разу, съ върху に類する結合において、早くから副詞タイプの結合のためのモデルとなった。

生格語尾 -y が与格語尾 -y と同形であったことについては、それはさして重大な否定的意味はもっていなかった。何故なら抽象名詞、集合名詞等の名詞にあって、前置詞に支配されない与格は、実際の使用の際に極めて稀であったからである。

-ŭ 語幹単数生格が -ŏ 語幹のそれに与えた影響は、東スラブ語の文獻においてはかなり早い時期 (XI 世紀) に記録されている。はっきりと大ロシア語方言の基盤に立った文獻には XIII 世紀から認められる, отъ лну (Новг. грам. 1265年)。

これに対して A. A. Шахматов は、専ら語の意味の面からの契機を重視しながら大要次のように述べている。

-ŭ 語幹格語尾のあるものが、-ŭ 語幹の独自の变化が失われたにも拘らず消滅しないで、他の語幹の変化の中に、何よりも、-ŏ / -jŏ 語幹男性名詞の変化の中に移行したことは、それなりに多くの原因があつた。

はじめに、-ŏ 語幹から -ŭ 語幹に浸透した最初の語尾の一つは、活動体名詞の単数対格における語尾 -a であつた, сына, вола。これが生格においても同じ сына, вола の形態の成立に続いたことは明白である。おそらくこのような状況が -ŭ 語幹において、単に対格においてのみならず生格においても、活動体、不活動体のカテゴリーが区別されるようになった結果を生んだといえよう。活動体名詞は語尾 -a を得、不活動名詞は語尾 -y を保持していた、生格 сына, вола, しかし、меду, олу, верху, низу, дому, миру。この状況は一面からすれば меду, олу, дому 等の語にあってはその保持する語尾 -y を、語尾 -a によって置き代えることを困難にした。他面からは、-ŏ 語幹から形成された他の不活動体名詞にその拡大を可能にした。おそらくすべてのロシア語方言において、語尾 -y と結合した観念はどのようなものであつたかということではなくて、それには個性化が存在せず、個性的で一定した個別的なものとして考え得ないものであつた。多分この事実は活動体(сынъ, волъ) を意味しない -ŭ 語幹名詞の大部分が、抽象的、集合的、あるいは

は何等かの物質的意味において結合していたことによるのであろう、миръ, върхъ, низъ, вѣнь, полъ, долъ, рядъ, даръ, домъ, медъ, олъ.

従がって、はじめは-ŭ 語幹において、やがてその影響のもとに-ŏ 語幹において、抽象概念及び集合体を意味する語を包含する必要のある文法カテゴリーの観念と、個別的な対象(活動体及び不活動体)を意味する対立カテゴリーの観念が作られた。このカテゴリーの前者は生格において語尾-y を得、後者は語尾-a を得た。このようにして語尾-y は、個別的对象を意味しないŏ 語幹名詞に移行していった。

A. A. Шахматовは以上の見解を古代ロシア語から例證し、現代ロシア語の資料によって確認する。彼は生格語尾-y をもつ語を次のように分類している。

1. 物質又は集合体を意味する語。
2. 土地を意味する語。
3. 抽象概念を意味する語。

A. A. Шахматов は古代ロシア語、現代ロシア語、現代白ロシア語、現代ウクライナ語から夥しい例をあげているが、ここでは古代ロシア語、現代ロシア語からの若干の例にとどめたい。

1. 古代ロシア語における生格語尾-y.

- (a) 物質又は集合体を意味する語。

зол(о) та ли женчугу ли, того моего полону, въску, воску, по патитцать десаткѣвъ лноу, вземша полоноу много, нашего товару, люду добраго, сладкаго оwoщу нѣтъ, алмазу, много раздаша брѣнцоу да перцоу.

- (б) 土地を意味する語。

оу пѣсчана броду, с мостоу, ис торъжку, до берегу моря, Козлова броду, Василцева стану, по конецъ Матвѣевского лугу, до Торшку, из Рѣму, с Нового Торгу, оу Доноу, из Бозкоу, около Бозкоу, оу бору.

- (в) 抽象概念を意味する語。

съ году на годъ, из(ъ) веку, за четветь году, до свѣту, от(ъ) мору от(ъ) великого, с году на год(ъ), третьяго году, до другого року, просить сроку не ждать, от сроку, от всего порядку, доходу.

2. 現代ロシア語における生格語尾-y.

- (a) 物質又は集合体を意味する語。

из ячменю, нету гороху, от чаю, дай пеплю, достань огню, лёду кусок, лену горсть, с вогню, винаградчку ирвать, мядку на палтину, ат агню, бѣлава снегу, из саману, ис камню, куляшкú нет.

- (б) 土地, 場所を意味する語。

из рынку, с базару, с потолоку, еду из городу, с уголку, с сенокосу, из лесу, с порогу, с берегу, из дому, из саду, из огороду, с дому, из коробу, из-под мосту, яблоки нашева саду, без бога не до парогу.

- (в) 抽象概念を意味する語。

с того году, без роду, без племени, с роду, без толку, без спросу, биз весу, с

будушова году, без покою, ни ходу, ни езау, с великого по́сту, до са́мага свету,
ро́сту не было́, для примеру.

С. П. Обнорский は、最も本質的な意味はアクセントにあると考える。

語尾 -y が夥しい数にのぼる -Ŏ 語幹名詞のあるものに滲透し、又あるものを避けて通るというのは決して偶然ではあり得ない。第一の段階において、語尾 -y を得たのは移動アクセントをもった名詞に限られていた。彼の考えによると、語尾 -y が -Û 語幹名詞から -Ŏ 語幹名詞に拡大した時点は、-Û 語幹名詞が移動アクセントをもった名詞に限られていた。アクセントは単数生格において語幹にとどまり、単數位格においては語尾に移動した。

単数生格	単數位格
меду́	в меду́
квасу́	в квасу́
снегу́	в снегу́

従がって、語尾 -y の滲透は決して偶然ではなく、法則性があったといえる。

これ等の語彙を観察するに、語幹に短かいか、あるいは長い下降アクセントをもった母音を有する語だけが、語尾 -y を得たと結論する。С. П. Обнорский にとっては、語幹にアクセントがあることと、不活動体であるという二つの契機が明白であって、意味の契機は決定的ではなかった。彼は語尾 -y の -Ŏ 語幹単数生格への滲透は、-Ŏ 語幹位格への滲透と平行して行けたので、この二つの語尾の研究は同時になされなければならないとした。

ところがА. А. Шахматов は、-Û 語幹名詞の影響は初め -Ŏ 語幹名詞の生格に現れて、それから位格に及んだと考えた。いずれにせよ何人もアクセントの役割を否定していない。すでにЛомоносовがРоссийская Грамматика, 1755年,において、単数生格及び前置格に語尾 -y をとる名詞の移動アクセントに着目していた。しかし、すべての人はそのアクセントの役割を相対的に遅かったと考えていたが、С. П. Обнорский だけがそれに本質的意味を認めていた。いずれにしても -Ŏ 語幹名詞と -Û 語幹名詞との相互作用の結果、-Ŏ 語幹に属する -а / -я 語尾が支配的で普遍的になった。-Û 語幹名詞活動体 сынъ, волъ が語尾 -а を得ることによって、この語尾が活動体のカテゴリーを明確にしたのである。

人を意味する活動体名詞における古い対格語尾と生格語尾との置き換えは、語尾 -y / -ю を不活動体に定着させて語尾 -а / -я を保持した, брата, вълка, учителя, мужа, Петра, Георгия. しかしそれはすべての不活動体名詞においてではなかった。

語尾 -y / -ю と共に使用される不活動体名詞は算えることのできないもので、特に два, оба と結合し得ない名詞である。それはこの数詞と結合する男性名詞は、古代ロシア語時代から一般に語尾 -а / -я の形態で定着していたからである、два стола, ножа, ручья. 換言すれば、それは主として物質名詞, гороху, воску, солоду, хмелю, 集合名詞 народу, пълку, лъсу, 抽象名詞であった, страху, долгу, 時とすると地名もこの語尾をとった。例えば, Слово о полку Игореве に съ Дону великого, испити шелокомъ Дону. Новгородские Граммоты に ис Торжьку とある。

今、古文献にこれ等の語尾の使用例を求めると、語尾 -а / -я と -y / -ю との間の揺れが著しいこと、語尾 -y / -ю は生きた話し言葉の中に存在していることが明らかである。この語尾は XI 世紀、即ち, Изборник Святослава, 1073年, から始まって生きた話し言葉を反映した文中に存在している。それは Русская правда に類する文献の中にも現れているが、特

に古文書の中で著るしい。これ等語彙の使用範囲の拡大の様は、XV 世紀ないし XVI 世紀に渡る文献にはっきりと現れている。Домострой においては、特に日常生活を内容とする項において、これ等の語彙グループに語尾 -y/-ю が使用されている。次の例には語尾 -y/-ю のみが見出されて、語尾 -a/-я の平行的使用がまったく認められない。

борщу, горьху, долгу, из дому, запасу, корму, меду, медку, морсу, у просолу, до сроку 等。

Судебники において語尾 -y/-ю をとる名詞の数は、接頭辞をもっても доходу, заговору, извету, найму, обыску, ответу, отказу, сносу, съезду, указу あるいはもたなくとも ездy, росту, 動詞派生の抽象名詞に著しく多い。

語尾 -y/-ю の拡大の過程はかなり強力なものであって、多くの場合借用語さえも捉えてしまった, до бунту, из рису, из тюлю, задать форсу, из-под караулу, до второго этажу. XVII 世紀の小説には数多くの用例が認められる, скарлату, сапфиру, уроку, резону, до танцу. 又この頃から話し言葉では活動体名詞にも使用されているし, от жениху, от отцу, 又中性名詞にも使用されている, сначала, с утра, от стаду, я бы до небу достал, возле полю, Оставала лебедь белая, От стаду да лебединогo. 一方この語尾は、接尾辞 -ышк, -ишк, -ушк をもつ名詞に滲透したものの標準語の規範とはならなかった, из домишку.

しかし生きた話し言葉の中に身を置いた語尾 -y/-ю の使用が拡大するにつれて、語尾 -a/-я との平行的な使用の際これ等の語尾の機能的使用の傾向が強まった。この場合文体的要素が強く働いている。これ等の形態の使い分けが明らかにされたのは、XVIII 世紀における民族的標準語としてのロシア語の形成が強力に進行した時期で、Ломоносов の標準語における三つの文体説が公認された時であった。格調高い文体においては語尾 -y/-ю の使用は避けられていた。

現代ロシア語においても語尾 -a/-я 及び -y/-ю の使用傾向はさして変らない。語尾 -y/-ю は物質的意味をもった名詞群に部分生格の意味で使用される。

килограмм винограду, литр керосину, купить гороху.

しかし、部分生格の意味がない場合には語尾 -a/-я が用いられる。

сбор винограда, продажа керосина, он не рвал гороха.

集合名詞 народ は類推により много народу となるが、量的関係がない場合には воля народа, просвещение народа となる。

もし生格語尾 -y/-ю をとり得る名詞に、形容詞、形動詞が用いられた場合には、普通、語尾 -a/-я が使用される。

кисть зрелого винограда, тарелка свежего творога, стакан крепкого чая.

又抽象的意味をもったある名詞群が、動作、状態、質の何等かの程度を示した場合に、即ち完全な容量で実現されないことを示した場合に、語尾 -y/-ю が使用される。

много, мало, блеску, браку, весу, вздору, визгу, жару, крику, лоску, простору, разговору, свету, спору, нагнать страху, прибавить ходу, наделать шуму.

しかし現代ロシア語においてはこの場合、屢々語尾 -a/-я が使用されるが、話し言葉の場合には語尾 -y/-ю が多い。

XIX 世紀の標準語において語尾 -y/-ю は、抽象、具象の意味をもった男性名詞に、現代におけるよりも遙かに多く使用されていた。

Но прежним чувствам нет возврата. (Лерм.). Отрядом книг уставил полку, читал, читал, а все без толку. (Пушк.). Двадцать десятин озимного посева.(Акс.).

語尾-y/ю は抽象名詞と同様に具象名詞にも使用されるが、その際、前置詞 из, от, с と共に用いられ、離脱、原因を示す。

Упустить из виду, уйти из дому, возвратиться из лесу, задохнуться от дыму, прыснуть со смеху, умереть со страху, умереть с голоду, крикнуть с испугу, поднять с полу.

又前置詞 без と共に用いて不在を示す。

купить без весу, работать без отдыха, брать без разбору, без спросу, без счету, торговать без риску, без убытку, двигаться без шуму.

しかし現代ロシア語においてはこのような形態だけが可能ではない。これと共に意味上副詞に近くない場合とか、成句になりきっていない場合には語尾-a が使用される。

最後に Русский язык и советское общество, Социолого-лингвистическое исследование, Морфология и синтаксис современного русского литературного языка に、語尾-y/-ю 及び-a/-я についての興味深い調査結果が詳細に報じられているが、ここではその一部を紹介することにしてこの稿を終えたいと思う。

XIX 世紀において、語尾-a 及び-y は、男性単数生格の意味を区別する手段として、文法的対比を示していたが、XX 世紀に移ると文法的、意味的対比は十分に明瞭ではなく、文法の力を欠いたものとなっている。напиться чаю 及び напиться чая, нет страху 及び нет страха, принеси сахару 及び принеси сахара は、何よりも文体の対比表現のために使用されている。

ここでは、普通、無意識に、機械的に、文学的表現とは無関係に使用されている、文体上中立の事務的用語の中から、部分生格の意味で屢々用いられている日常用語が調査の対象としてとり上げられている。具体的には革命前と革命後に出版された、料理便覧と料理書数冊であった。革命前(1900年-1918年)の出版から2,000例、革命後の出版からは3,000例、その内訳は、20年代の終りから30年代の初めまでが1,000例、30年代の終りが1,000例、50年代から60年代までが1,000例、総計5,000例が選択された。

語尾-a/-y は部分生格の意味においてのみ集計されて、生格の定語的用法、あるいは前置詞との使用例はすべて除外されている。部分生格の異なるニュアンスをもった典型的コンテキストは次の通りである。

1. 名詞構文

стакан сахару と стакан сахара, ложка песку と ложка песка, стакан крепкого чая と чаю, несколько капель соку と сока.

2. 動詞構文

прибавить больше бульона と бульону, положить хрена と хрену, прибавлять по вкусу сахара と сахару.

語尾-y の前記資料による頻度数は、XX 世紀初頭においては極めて高く89.1%を占めていた。その後20年代の終りから30年代の初めにかけてこの関係は一変し、語尾-a は50.7%に達して十分な均衡を保った。30年代で語尾-y は引続き劣勢を辿り、28.6%に落ちた。語尾-y の頻度数は20年代から30年代にかけて急角度に下降し、その後はゆるやかな下降曲

線を書いて現代に続いている。この急激な下降は革命による社会構造の変化に対応するもので、革命前に出版された調査資料には話し言葉との緊密な関係が認められたが、革命後の調査資料における用語は一層標準化、規格化されて文章語の色合を濃くしている。つまり、これ等資料の著者達は、話し言葉とそれに個有の形態を避けたのである。

しかし、この推移は決して一様ではなかった。それぞれの語はそれぞれの速さで移っていた。ある構文のもとでは積極的な交替は生じなかった。頻度数と移行の速さには一定の法則性が認められる。頻度数が高い場合、それに応じて語尾-y を保持する期間が長くなった。例えば、極めて頻度数の高い語 сахар は、XX 世紀初頭に 600 例中16例が語尾-a を、584 例が語尾-y をとっていた。それが20年代の終りから30年代の初めには、232 例中 125 例が語尾-a を、107 例が語尾-y をとって逆転した。しかしながら30年代の終りには、249 例中語尾-a は45例、語尾-y は 204 例となって回復し、更に50年代から60年代にかけて 231 例中語尾-a は71例、語尾-y は 160 例を示し、再び語尾-y の減少の傾向が認められた。その画く曲線はゆるやかなものであった。

中間的頻度数に該当する луку, перцу, рису, сыру, творогу, жиру は、話し言葉に支えられて、稀用の эстрагону - эстрагона, шпинату - шпината, солоду - солода よりも幾分長期間語尾-y を保持した。頻度数の低い稀用の語は、XX 世紀初頭にはあらかた語尾-y を語尾-a に置き代えていた。

以上要約すると、語尾-y の使用の減少と語尾-y をとる名詞群の縮少の傾向は注目に値する。XX 世紀初頭に、語尾-y をとり得る名詞として調査資料から登録された名詞は92語に達したが、それが50年代から60年代にかけて僅か15語に減少していた。

参 考 文 献

- АН СССР. Ин-т русского языка. Грамматика русского языка. Т. 1. М., Изд-во АН СССР, 1960.
- Борковский В. И. и Кузнецов П. С. Историческая грамматика русского языка. М., Изд-во АН СССР, 1963.
- Булаховский Л. А. Исторический комментарий к русскому литературному языку. Киев, "Радянська школа", 1958.
- русский язык и советское общество. Под ред. М. В. Панова. Морфология и синтаксис современного русского литературного языка. М., "Наука", 1968.
- Современный русский язык. Ч. 2. (Морфология и синтаксис). Под ред. Е. М. Галкиной-Федорук. М., Изд-во МГУ, 1964.
- Соколова М. А. Очерки по исторической грамматике русского языка. Л., Изд-во ЛГУ, 1962.
- Черных П. Я. Историческая грамматика русского языка. М., учпедгиз, 1954.
- Шахматов А. А. Историческая морфология русского языка. М., учпедгиз, 1957.